Meiko　Awaji－Div.　Monthly　Column.（増田塾長の毎月コラム）

The Atlas　＜ 2024 年 4 月号 ＞

【2024 年の座右の銘】

“「読む」ことは、自分を奏で、他人を共振させること。” 三田村雅子（源氏物語がわかる　より）

ー＊ー

＊＊線路の友情「特急はと」と「結核病棟青葉荘」＜仲を取り持つ昭和天皇＞＊＊

今年、北陸新幹線が延線しました。日本全国が新幹線網によってつながったことで移動時間が大幅に短縮し、新幹線は交通手段としてますます便利になってきました。その一方で、旅情は薄れ、車窓から見える景色が変わってしまったことも事実です。

今月のコラムでは、鉄道オタクである塾長が好きな、古き良き時代の鉄道の一コマを塾生の皆さんに伝えたいと思います。

１９５１年頃はまだ新幹線も無く、大きな蒸気機関車が特急列車を轟音と共に引っ張りながら線路を疾走する姿が各所で見られました。その特急列車の中でも「つばめ」と「はと」が特に有名です。今でいうキャビンアテンダントのような「つばめガール」や「はとガール」と呼ばれる人も搭乗していました。

ある時、東京行の特急「はと」が大阪を出て２０分、乗客も落ち着き、食堂車も昼食客で賑わい始めた頃のことです。食堂車で会計をしていた係の女性が何気なく窓の外に目をやったところ、線路脇の建物の窓から、白衣を着た青年が「はと」に向けて手を振っているのが見えました。女性は、青年の知り合いが「はと」に乗っているのだろうと思いました。ところが、次に乗務したときにも同じ青年を見たのです。またその次も・・・。彼女は、あの青年は特急「はと」に向けて手を振っているのだと悟りました。そしてある時、青年に応えるように手を振り返したのです。青年がいた場所は、ある紡績工場の結核療養所「青葉荘」でした。当時、肺結核は死亡率も高く長期療養が必要な難病の一つでした。こうしたやりとりを続けるうちに手を振る青葉荘の人は増え、「はと」でも車掌や食堂車のスタッフ、そして、はとガールまでもが、通過する時に手を振るようになりました。列車を引っ張る蒸気機関車 C62 の機関士は、そこの通過時には速度を落として汽笛を鳴らすことでエールを送りました。その当時は JR ではなく国鉄の時代でしたので、あまりに加熱するエールの交換を止めるように指示が出ましたが、多くの乗客が応援することもあり、このエールの交換はその後も続けられました。

そんな中、思いがけないことがおこりました。１９５３年、青葉荘に昭和天皇の代理の侍従（じじゅう）の方が訪問され、昭和天皇の御製（ぎょせい）が届けられました。御製とは、天皇や皇族が自ら創った文書や詩歌、絵画などのことです。そこには、この歌が書いてありました。

山崎に　病養う人見れば　にほえる花も　美しからず

昭和天皇は関西や九州に行幸の折、お召（めし）列車の窓から京都の山崎にある青葉荘をご覧になり、興味を持たれて新聞の記事などを幾つも探し、「はと」の人々と青葉荘の患者との友情をお知りになりました。そして当時としては異例の御製を下されたのです。

その後、スピードアップの波が鉄道界にも押し寄せ、もはや蒸気機関車が牽引する時代も終わりを告げようとしていました。１９６０年５月３１日１２時３０分。東京行特急「はと」は大阪駅を定刻に出発しました。１２時５１分、「はと」は大きく速度を落とします。青葉荘の庭に患者と職員全員が出て、手を振っています。「ごきげんよう　はと」と大書した横断幕を掲げ、１５０羽の鳩と多くの風船が放たれ、一斉に青空を彩りました。青葉荘の人々は「はと」が見えなくなってもいつまでもいつまでも手を振っていました。この日が、特急「はと」最後の日でした。

ちなみに特急「はと」や「つばめ」を牽引していた機関車の１台が C62 の２号機で、現在、京都市の梅小路鉄道博物館に保存されています。この夏の予定に同館見学はどうでしょうか。その時、特急「はと」と青葉荘の人々の心の交流を思い出してもらえると嬉しいです。

（文：明光義塾淡路学区　塾長　増田文治）